

K

「楓の風」らしい看護の取り組みを発信

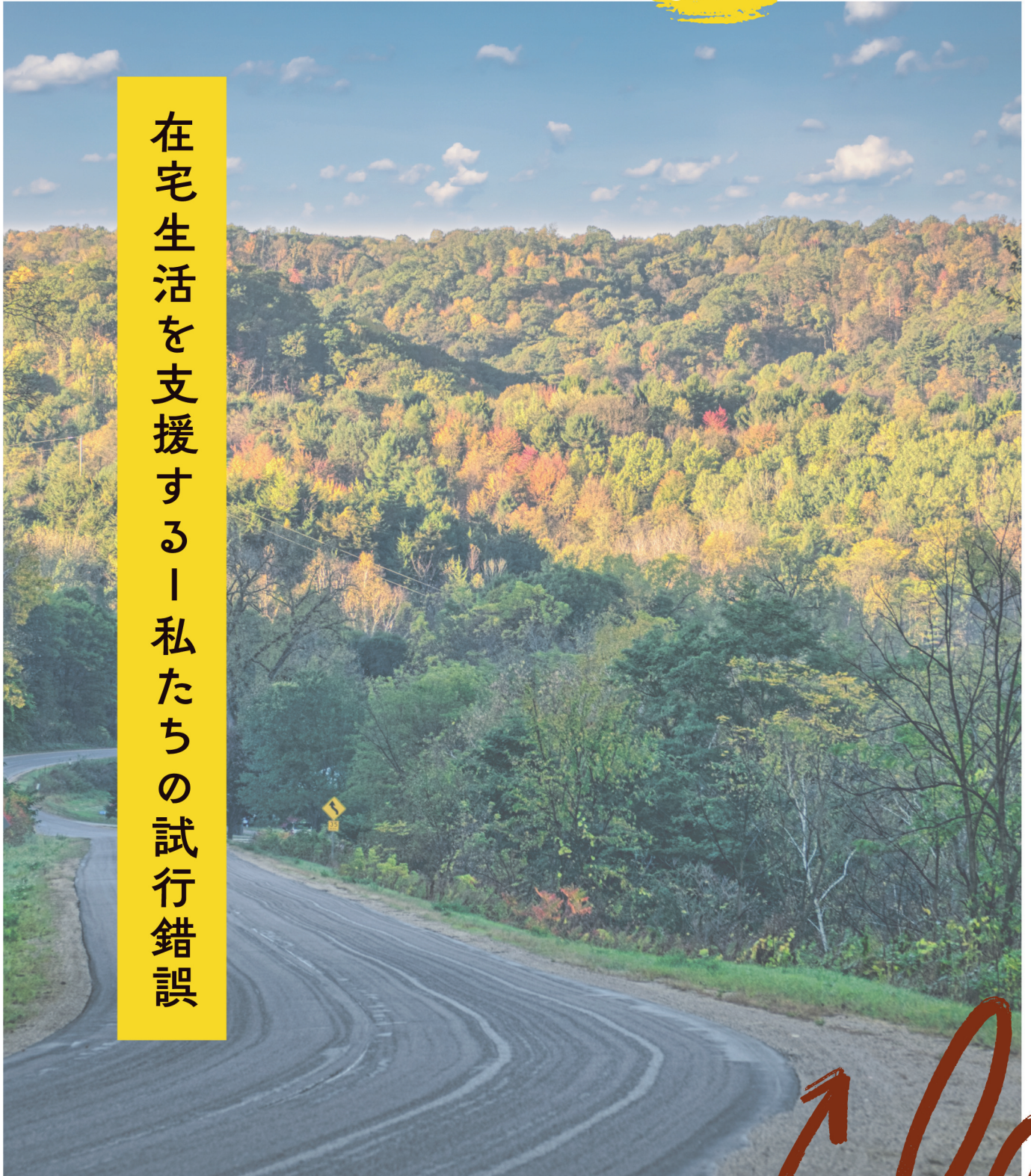


在宅療養支援

楓の風

KAEDE TIMES 2026

在宅生活を支援するー私たちの試行錯誤



ー在宅を支える全てのみなさまへー

私たち、「楓の風」スタッフが、どのような想いで在宅支援をしているのかを、一人でも多くの方に知っていただきたい！と思い、

「楓の風」らしい取り組みをご紹介します、ニュースレターをはじめました！



Case 15

終末期の療養では、**安全や安楽を優先するあまり、ご本人が大切にしてきた過ごし方が難しくなる**ことがあります。今回ご紹介するのは、腸管穿孔を伴う進行がんのため予後約1か月と説明を受けながら、「**最期まで自宅で、自分らしく過ごしたい**」と希望された60代男性の事例です。

ご家族、多職種と一緒に、その願いを支えました。

ケース

「寝たきりにはなりたくない」と最期まで自分の生活を望まれた方

60代男性。S状結腸がん、肺・肝転移があり、腸管穿孔を契機に緩和ケアへ移行しました。退院後は腹痛やストマからの出血、転倒などがあり、徐々に状態が低下。

それでもご本人は、

「**起きていたい」「家では好きなものを食べ、お酒も飲みたい**」

と希望され、ベッド上だけで過ごすことを望まれました。



実施した訪問看護・多職種支援

ご家族はご本人の希望を尊重し、転倒時にも息子さんや娘さんが駆けつけられる体制を整えました。**医療者も「制限する」のではなく、どうすれば希望を実現できるかを検討。**食事内容を工夫し、訪問医と相談のうえ飲酒も継続しました。

疼痛管理では、ご本人が自分でレスキュー薬を使用できる方法を一緒に検討し、ご家族にも薬剤の使用方法や症状への対応を共有。

訪問診療、薬局、訪問看護が情報を密に共有し、状態変化に合わせて支援を調整しました。



その後の経過と気づき

誕生日には在宅チームも一緒に祝い、好物のケーキやお寿司、ノンアルコール飲料を楽しみました。体調が良い日には、玄関まで車椅子で移動して外を眺め、

「**いやー、嬉しい。生きててよかった**」と涙ぐまれる姿もありました。

最期まで「起きていたい」という希望は変わらず、ご家族もその思いを支え続けました。

亡くなる直前まで、ご本人らしい姿勢で過ごされ、ご家族に見守られながら自宅で最期を迎えられました。終末期の支援では、**その方が何を大切に生きてきたのかを知り、**

できる方法を一緒に考えることも欠かせません。多職種とご家族が同じ目標を共有することで、最期までその人らしい時間を支えられることを学んだ事例です。